

日本郭沫若研究会事務局

二〇一一年三月三十一日発行

郭沫若研究會報

第十二号 (総No. 13)

目次

【First World Congress of the International Guo Moro Academy 特集】

郭沫若書法管見・・・・・・・・・・・・・・・・河内利治（君平）  
九州大学所蔵の郭沫若「盈盈灘水碧羅紈」詩軸小考・・・・・・・・岸田憲也

日本郭沫若研究会事務局

二〇一一年三月三十一日発行

〒八六二一八六八〇

熊本県熊本市大江二一五一

熊本学園大学外国語学部岩佐研究室気付

TEL〇九六一三六四一七〇九八（直通）

Fax〇九六一三七二一〇七〇二

【郭沫若文献史料国際学術討論会】「IGMA年会」報告】

「郭沫若文献史料国際学術討論会」及び「IGMA年会」に参加して  
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤田梨那

【郭沫若研究会（六高記念館、二〇一〇年六月五日）報告】

郭沫若研究会のこと・・・・・・・・・・・・・・・・大高順雄

【エッセー】

郭沫若―鄭成功―安平橋・・・・・・・・・・齊藤孝治  
国泰大戲院―郭沫若『屈原』を上演した劇場・・・・・・・・瀨戸 宏  
安藤彦太郎先生ご夫婦と郭沫若の友情・・・・・・・・藤田梨那

国際郭沫若学会（IGMA）成立・『郭沫若の世界』刊行・

『日本郭沫若研究資料集』出版・藤田梨那訳『女神』刊行・

新入会員紹介・退会会員・会員異動・編集後記・・・・・・・・事務局

## 郭沫若書法管見

河内 利治(君平) (大東文化大学)

### 一 はじめに

First World Congress of the International Guo Moruo Academy (IGMA) に先立ち、日本の岡山県立美術館で折り良く、「日中友好の架け橋 郭沫若」展が開催された。筆者は二〇〇九年六月十九日(金)に本展を参観し、郭沫若の数点の書跡(親筆)に感銘を受けた。まずそれを紹介してみたい。展覧会の主催は、岡山県立美術館／山陽新聞社／郭沫若記念館(北京)／NPO活動法人聚友日中友好交流促進協会、会期は、前期／二〇〇九年六月五日(金)～七月十二日(日)、後期／二〇〇九年七月十七日(金)～八月二十三日(日)、会場は、岡山県立美術館地下一階展示室。観覧料は一般三〇〇円、時間は九時～十七時であった。



周知のように、郭沫若(一八九二—一九七八)は、中国四川省乐山に生まれ、大正三(一九一四)年から大正十二年(一九二三)まで日本に留学し、東京第一高等学校予科入学(一九一四)、岡山第六高等学校入学(一九一五—一九一七)、九州帝大医学部を卒業して帰国した(一九一八—一九二三)。その後、蔣介石に追われ、内山完造らの支援により、昭和三年(一九二八)日本へ亡命。千葉県市川市に在住し、日中戦争直前の昭和十二年(一九三七)に帰国した。このように彼は生涯のおよそ四分の一を日本で生活している。戦後の昭和三十年(一九五五)には、中国学術文化視察団団長として来日して日本各地で交流したが、なかでも岡山大学を訪問し、また丹頂鶴二羽を翌年に岡山後樂園に寄贈したことは美談として継承されている。

本展は、郭沫若記念館(北京)所蔵の三十六点の書画類、愛用の文具類、一四〇余点の写真等の展示(前期・後期とも／一部架け替えあり)と、日本国内に所在するものや岡山との関係を伝える各種資料を、特設コーナーを設けて紹介するもの(前期のみ)からなる。

実際に鑑賞した作品から、特に印象に残った作品について言及したい。

《魯迅を悼む 三四cm×九六cm／一九三六年十月十九日夜》  
文豪・魯迅の訃報を聞いた生々しい弔文の草稿である。黒く抹消したり、小さく挿入字句を書いたり、墨痕淋漓としている。厳密に言えば本作品は純粹な芸術作品と呼べ

ないという見方もあるだろうが、草稿が立派な作品となつて伝来している例は書道史上に数多い。例えば王羲之《蘭亭叙》、孫過庭《書譜》、顔真卿《争坐位稿》など、殊に行草作品においては枚挙に暇がない。現代漢語で書かれている点でも興味深いものである。真情の吐露という点において、まさしく書法芸術作品と呼ぶべきものと考ええる。

《七言聯一六六 cm×四一cm×二／一九四九年》

釈文：國有干城扶赤幟／民之喉舌發黃鐘



この対聯には多くの典故が織り込まれ、意味深長である。「干城」は、御外衛内の城(国の守り)で、借りて將軍(軍人)を指す。「赤幟」は、ここでは共產党の旗を意味するだろう。「喉舌」は、古代の御史のたぐいの言官(文官)の意。例えば『詩経』大雅・烝民に「出納王命、王之喉舌」とあ

り、ここでは代言者の意に用いている。「黄鐘」は、古代十二律の中の第一律で樂器を指す。例えば屈原「卜居」に「黄鐘毀棄、瓦釜雷鳴」とある。このように典雅な聯句を通じて、郭沫若はため書きの「初梨」、すなわち李初梨(一九〇〇—一九四)が、文武兼備の国家の棟梁であると称揚したと理解できる。しかし別説があり、李一氓(一九〇三—一九〇)に贈ったとも解されている。それは『郭沫若年譜 上巻』五七八頁「一九四九年一月二日」の項に、「為李一氓書對聯一副“國有干城扶赤幟、民之喉舌發黃鐘。”載一九七九年六月十日北京《光明日報》、由輯録者題為《書為李一氓聯語》。」とあるからである。とまれ書作品は、堂々とした書きぶり、郭沫若の行書對聯の代表作であると言えよう。なぜなら必ずといってよいほど既刊の作品集に紹介されているからである。その理由は、顔真卿の書法を基調とした正統の堂々とした書きぶりだからである。

《昭覺寺を訪ねる(七言絶句) 一三七 cm×六五 cm／一九五五年四月》



釈文「一別蓉城卅二年、今來昭覺學逃禪。丈雪破山人已渺、幾行遺墨見薪傳。」句中「蓉城」は四川成都市の別称。

「卅二年」は一九一三年（中華民國二〇大正二）から数えて四十二年目のことの意。郭沫若は一九一三年、四川高等学堂理科と天津陸軍軍医学校に合格したが入学せず、年末に留学のために日本へ渡った。それ以来、故郷に帰っていないかったことを指そう。「昭覺」は昭覺寺のことで、成都市の北、青龍郷にある。もとは漢代に眉州司馬であった董常の屋敷で、唐の貞観年間に佛刹に改められ「建元寺」となり、僖宗の乾符四年（八七七年）、禪宗曹洞宗の休夢禪師が住持となり「昭覺寺」と改名した。

『郭沫若年譜 下巻』一二四頁「一九五五年四月下旬」の項に、「由成都市長李宗林陪同參觀文殊院、応該院要求題七絶一首。又、參觀昭覺寺、亦題七絶一首。後面一首手迹載一九七九年《中国書画》一期。」とある。この記載に基づけば、本作は一九五五年四月下旬、昭覺寺を訪ねた時に、昭覺寺で揮毫したことになる。本作品の魅力は、何といっても宿墨（腐った墨）の発墨がはつきりと見てとれる点である。「二〇年／人」などの字は墨の滲みが強烈で、「渺」字の左払いをかなり長く引っ張っているのが印象に残る。なお一九五〇年代入ると、落款「郭沫若」の書き方が変化していく。そして六〇年代以降は固定されるようである。すなわち初めは「郭沫若」三文字を連続してあたかも一筆書きのように草書で書いているが、明らかに六〇年代以降は一字ずつ切り離した行書の単体に変っていくことが見て取

れる。本作の落款の書き方はその過渡的な書きぶりである。

《故宮藏猫蝶硯拓本題字八〇 cm×三五 cm／一九六二年》



1949



1955



1961

故宮博物院収蔵の端溪硯について題字として記した作品である。端溪硯には所謂「眼」があるものが佳硯とされるが、

本硯には鸚鵡眼（くよくがん）があり、それを猫の両目と蝶の羽の紋様に利用したという逸品である。

「在故宮中得見此研、原江邨居士旧藏。鐫刻甚為精巧、硯質乃端石、利用二鸚鵡眼以為貓眼、靈活有神。硯面蝶翅諸眼亦為石眼、可謂天造地設。硯工惜不知名耳。一九六二年四月十五日晨、郭沫若題。／考古研究所魏善臣同志拓制。吳祖謙不知何許人、考有清一代丁酉年内無閏三月者、待考。一九六二年六月十七日晨郭沫若補題。」

「江邨居士」は『江村銷夏記』を撰した清の高士奇（一六四五—一七〇四）、字は正公、号は澹人、江村。錢塘人、原籍は平湖）を指す。硯の裏面には蝶々を刻するほか、「丁酉閏三月唐寅、韋齋吳祖謙」と刻す。「吳祖謙」は郭沫若が言う通り「不知何許人」で不明。「江邨居士」や「潮吟堂珍藏」の印刻もある。

北京の故宮といえはすぐ思い出すのが「故宮博物院」の題字である。郭沫若の書として現在も掲げられている著名な匾額である。そのほかにも大学、博物館、研究機関などの題字を数多く残している。

## 二、「郭体」書法の淵源

現代中国において、郭沫若は書家として、一九八〇年代後半から「書法植基顏真卿而不落古人窠臼、自成面目、精小楷、尤擅行草、飛揚灑脫、不拘繩墨。」<sup>(1)</sup> および「書法顏真卿、而有其個人面貌、迥異時流。」<sup>(2)</sup> と評され、現代

日本においても「その書は（郭体）と称される行草書がよく知られている。筆鋒の開閉を巧に操り、縦横に筆を走らせる奔放な作風である。早年には顏真卿を学び、また書譜や包世臣の理論も研究したという。目まぐるしい運筆にもかかわらず、線條に凝縮した筆力が感じられるのは、顔法の賜物か。」<sup>(3)</sup> と評されており、ほぼ同様の評価がなされていると言える。以下、郭沫若の筆法の特徴を考察しながら、「郭体」と称される書法が顔法を淵源とする点について検証してみる。

一九八八年三月に四川美術出版社より『民国時期書法』上中下の三冊本が出版され、中冊に郭沫若の書法作品、①草書軸《中國字之藝術化》、②行書軸《大好河山幾戰場》、③草書軸《晨朝盈耳溢清音》、④草書聯《百粵大雲搖梅色／千山靜氣壓漁場》の四点が掲載される<sup>(4)</sup>。この中の①、③、④の三点は『中國書法鑒賞大辭典』<sup>(5)</sup>にそれぞれA《論書軸》、B《百粵千山聯》、C《致子易詩書軸》として、鑑賞分析を行っているので、参照しながら考察を試みる。

### A 《論書軸》…①草書軸 《中國字之藝術化》

「中國字之藝術

化、其源甚遠、觀東周古器、多刻銘於器表、而取發稱之形字。既多經心結構、銳意求工、文亦多有

中國字之藝術化之源甚遠、觀  
東周古器、多刻銘於器表、而取  
發稱之形字、既多經心結構、銳  
意求工、文亦多有

韻焉。」

郭沫若の書法は、早年に顔真卿を学んだことが、彼の「洪波曲」第六節に「我従前也学過顔字、在懸肘用筆上也是用過一番功夫的。」と書かれているが、本作はその色合いが濃い。

B 《百粵千山聯》…④草書聯《百粵大雲搖梅色／千山靜氣壓漁場》上聯の「集李滄溟」とは、明代の詩人の李攀龍を指す。

百粵大雲 搖梅色

千山靜氣 壓漁場

C 《致子易詩書軸》…③草書軸《晨朝盈耳溢清音》

「晨朝盈耳溢清音、經雨乾坤萬籟吟。始識紅臣何所錯、卅年慰得寂寥心。／子易先生正、郭沫若。」

晨朝盈耳 溢清音  
經雨乾坤 萬籟吟  
始識紅臣 何所錯  
卅年慰得 寂寥心

本作は前掲B《百粵千山聯》と似通った書風である。B・Cともに顔法というよりも、王羲之系統の書であり、各自形が縦長である。顔法になると円みを帯び、雄渾な味わいが加味されていくように思われる。行草とは違い、楷書作品《五言聯・摧翻經石峪／壓倒逍遙樓》一九六五年作は、

まったく顔法の楷書による制作である。

摧翻經石峪

石峪山麓 郭沫若書

壓倒逍遙樓

郭沫若書

A・B・Cの三作品は、書作年代が書かれていないため、正確な制作年代は不明であるが、上述した「郭沫若」の署名や所収本から見て、五十年代以前の民国期の作品であろう。所謂「郭体」と呼ばれる作品とは、どのようなものを目指すのであろうか。その一例として《武則天を詠ず九三・五 cm ×二二〇 cm／一九六一年》を挙げてみよう。先ず造形的に目に付くのは、最終点画の誇張である。一行目「載」／五行目「聲」／六行目「敷」の三文字は、全体の中で各字形を大きく見せる効果があるが、その決め手となっているのが「載」左払い／「聲」撥ね／「敷」右払い、といった最終画の誇張にある。その誇張は、非常に華麗でかつ力強

い。それは文字の大小、線の細太の変化がもたらすものであり、変化が多ければ多いほど華麗に見えるが、骨格がしっかりしているので安定感を与える。審美の角度から言えば、上述A《論書軸》のように、顔法の全体的に円みを帯びた「沈着」と、B《百粵千山聯》／C《致子易詩書軸》のように王法のやや縦長の「瀟洒」さが融合したものと云える。



顔真卿《祭姪文稿》部分



王羲之  
集字聖教序



顔真卿  
祭姪文稿



顔真卿  
唐争坐位稿



A 郭沫若  
《論書軸》



一九五六年九月一日	世界和平理事会在齐白石に国際和平獎金を授与する儀式が北京で 举行された。世界和平理事会副主席の郭沫若が授与儀式を主催し、「齐白石 先生は絵画に精通するだけでなく、刻印にも長じ、彼の書法は人に抜きん 出ている。」と話した。
一九五八年五月二日	豊道春海を团长とする日本書道家代表团一行十四人が訪中し、周恩来、郭 沫若、楚图南らが前後して代表团全員と会見。
一九六〇年九月六日	日本書道文化联合会、日中文化交流協会、毎日新聞社、全日本書道連盟合 同主催による、「第二回現代中国書法展」が東京で開催、中島健三、豊道春 海、土岐善麿、片山哲、野間宏らが開幕式に出席、展示作品は郭沫若、梅 蘭芳、鄭誦先、金禹民、杜襄、商衍瀛、趙質伯、陳雲誥、孫榮彬、許以粟、 馬晋、孫誦昭、俞家驥、潘伯鷹、溥雪齋、章士釗、許宝璜、李慎、胡鳳衡、 溥惠、張公制、李鼎遺、翟奉南、曹家麒、顧韻剛、張慧中、蕭鍾美、寧伯 龍、蕭龍友、老舍、王傳恭、陳叔通、殷伯衡、林志鈞、都錦春、鄧以鰲、 周琪、沈尹默、惠孝同、周諮度、黎葛民、田名瑜、姚撫屏、徐之謙、徐伯 清、劉博琴、杜嘉、陳植元、郭沫若、康伯藩、康殷、吳兆瑛、何炎、靳志 黎澤泰、陳半丁、吳仲超、謝無量、董立言、寧斧成、單文質、魏長青、頓 羣、秦仲文、王繼光の全六十四点。

「郭体」の淵源については、上図のように「國」字を比較すると、王羲之《集字聖教序》を習い、顔真卿の《祭姪文稿》や《争坐位文稿》などを習った形跡が看取できる。王法の縦長の細身の造形に、顔法の方形の円みを帯びた造形を加味していると言える。この学書方法は伝統的で正統であり、学書過程も極めて自然であり正攻法と言える。

### 三. 郭沫若と日中書法交流

一九九三年四月に中国旅遊出版社より馮亦吾主編『中国書法今鑒一九四九—一九九〇』が出版され、その冒頭に編年体の「書壇記事」がある。その中から郭沫若に関する全ての記載を拾ってみよう。



一九六二年六月	日本書道文化聯合会など合同主催の「中国書法展覧」が東京で展覧。展示作品は郭沫若、何香凝、梅蘭芳、老舍、齊燕銘、陳叔通、朱光、陳雲誥、溥雪齋、惠孝同、豐子愷ほか全七十四点。
一九六五年五月三日	郭沫若が雑誌「文物」に「由王謝墓誌的出土論到『蘭亭序』的真偽」題する一文を発表し、『蘭亭序』は依託であり、王羲之の原文でないのみならず、王羲之の墨跡でもない」と考え、「文章と墨跡は智永の依託するところものである」とした。郭沫若の文章が発表されて以降、学术界では熱心に論争が繰り広げられ、賛成と反対の多くの論考が新聞や雑誌に発表された。
一九六六年五月十二日	日本書道文化聯合会、全日本書道連盟など合同主催による「中国現代書法展」が東京で開幕。展示作品は郭沫若、何香凝、溥雪齋、唐蘭、老舍、趙樸初、王个簣、容庚、潘天壽、啓功ほか全一二六点。
一九七二年五月	郭沫若が雑誌「文物」に「新疆出土的晋人写本三國志殘卷」と題する一文を発表し、『蘭亭序』真偽問題を再び論じる。
※一九七七年七月一日	日中文化交流協會、毎日新聞社、日本書道文化聯合会など合同主催による「現代中国書法展覧」が東京で開幕。展示作品は趙樸初、王个簣、顧廷龍、麥華三、于立羣、啓功、金禹民、徐之謙、段紹嘉ほか全二四〇点。（郭沫若の名が無い）
一九七八年六月三日	郭沫若が北京で逝去、享年八六歳。

上記の年表から伺い知れるのは、中国書法史上の名品、王羲之書《蘭亭序》に対して、その真偽の問題を提起した点（一九六五／一九七二）と、「現代中国書法展覧」の最重要メンバーとして活躍していた点であろう。一九五七年十一月「第一回現代中国書法展」が東京で開幕された時には参加しなかったようであるが、一九六〇年の第二回以降、六二年、六六年とトップに名が上がっている。

また遺された写真を見ると、豊道春海と一九六四年七月十三日に自宅で歓談し、六六年四月十一日に「日本書道訪中団」と面会し、「日中外交正常化」前日の一九七二年九月二十八日に田中角栄首相を故宮に案内し、米芾書《苕溪詩卷》（Chao Xi Shi Juan）の前で説明していることが判る。

郭沫若（左）と豊道春海（右）



田中角栄首相を故宮に案内



「日本書道訪中団」と面会

#### 四. おわりに

本稿は郭沫若の書法について、書作品、「郭体」の淵源、日中書法交流の三つの側面から、作品、文献、写真を活用しながら簡単な紹介をしたにすぎない。その中で、三番目の日中書法交流における郭沫若の存在が非常に重要であり大切であることに少々言及し得たと思っている。よって本稿に些かの意義があるとすれば、日中書法交流史上における郭沫若の位置づけを行うよう提起する点にある。現代日本において管見の及ぶ範囲では、郭沫若の書法を専門的に研究する学者や書家は殆どいない。その意味において、本稿は先ず紹介することに徹し、将来に一人でも多くの江湖諸氏が郭沫若の書法研究に従事される布石となれど願っている。

最後に、本稿を執筆にするにあたり、写真撮影のご協力を賜った岡山県立美術館の中村麻里子主任学芸員、ならびに諸資料を貸与くださった藤田梨那教授(国士舘大)、鈴木晴彦教授(日本大)、澤田雅弘教授(大東大)に感謝申し上げます。

#### 【主要参考文献／資料】\* 日本出版

一九八二・五… 龔濟民／方仁念「編」『郭沫若年譜(上・下)』天津人民出版社

一九八八・三… 『民国時期書法(中冊)』四川美術出版社

一九八九・十… 『中國書法鑒賞大辭典』大地出版社

\* 一九九二・十一… 『郭沫若展—日中外交正常化—(〇周年記念・郭沫若生誕一〇〇周年記念)財団法人日中友好会館

一九九二・十一… 肖玫「著」『郭沫若』文物出版社

一九九三・四… 馮亦吾「主編」『中國書法今鑒一九四九—一九九〇』中國旅遊出版社

一九九九・十一… 郭平英「主編」『郭沫若書法集』四川辭書出版社  
二〇〇二・五… 趙笑潔／東野長河「著」『中國書法家全集 郭沫若』河北教育出版社

二〇〇二・十一… 史永元「著」『郭沫若書法藝術』江蘇教育出版社  
二〇〇三・三… 鈴木晴彦「著」『書道史散步「中国編」第五話 郭沫若—書道美術新聞七七—/七七—』

二〇〇三・七… 万力「編」『名人書法字匯 郭沫若卷』中州古籍出版社

二〇〇七・九… 郭庶英／張鼎立「編」『郭沫若于立群書法選集』中國書店

\* 二〇〇九・六… 『日中友好の架け橋 郭沫若』岡山県立美術館

VCD2.0 『郭沫若書法藝術』文物出版社 (ISBN CN:ML8-03-0002 0V・K)



九州大学 (1955年)

注

- (1) 『中國書法鑒賞大辭典』 大地出版社、一九八九年十月、下冊一四六〇頁「小傳」。
- (2) 『中國美術家人名辭典』 上海人民美術出版社、一九九一年十二月、九五二頁。
- (3) 『中國書人名鑑』 二玄社、二〇〇七年十月、二二七頁。
- (4) 『民国時期書法』 四川美術出版社、一九八八年三月、中冊二八二頁、二八三頁、二八四頁、二八五頁。
- (5) 『中國書法鑒賞大辭典』 大地出版社、一九八九年十月、下冊一四六〇頁—一四六一頁。

## 九州大学所蔵の郭沫若「盈盈灘水碧羅紈」詩軸小考

岸田 憲也（九州大学大学院）

郭沫若の母校である九州大学には、彼と所縁（ゆかり）ある多くの文物が所蔵されている(1)。その中でも、墨跡・詩軸「盈盈灘水碧羅紈（七言律詩）」（同大学附属図書館医学分館蔵(2)、以下は「詩軸」と略称）は、森本憲治のエッセーによってその存在が知られるものの、最近まで郭沫若研究者にすら注目されて来なかつた。本稿は、九州大学所蔵の郭沫若関連文物、とりわけ詩軸に焦点を当て、関連する人物及び描かれた情景の分析を試みようとするものである。また、郭沫若研究における詩軸の価値に関しても言及しようとするものである。

### 一．詩軸の概要

詩軸の全文は次の通りである。

盈盈灘水碧羅紈、萬轉千廻盡異觀。  
岸上青螺雕不就、崖頭白馬畫應難。  
停舟飽食江魚美、試彈驚飛澤鳥寒。  
對酒當歌慷以慨、一簣漁火夜方闌。

古川直學兄 囑書 戊子（一九四八年—筆者注）  
初夏 郭沫若（落款・郭沫若）

この七言律詩は郭沫若のものであるが、詩軸が初出の作品ではない。『郭沫若著訳及研究資料』第一冊（成都市図書館編印、一九八〇年、一一五頁）には、もとは「舟游陽朔二首」其二という詩題であり、「一九三八年十二月作於桂林。載《光明日報》一九六三年十二月二十四日。見：《潮汐集》五九年作家（作家出版社—筆者注）版四五頁。《崑崙行》六五年広西（広西僮族自治区人民出版社—筆者注）版九頁。」とある(3)。

### 二．詩軸をめぐる三人の人物

前述のように現在、詩軸は九州大学附属図書館医学分館に所蔵されている。詩軸が同大学の所蔵になった経緯を知るために、まず詩軸をめぐる人物関係を整理しておく。

## (一) 郭沫若と古川直

古川直に関して詳細は明らかではないが、前述の森本憲治のエッセーに次のようにある。

級友古川直君は、原籍熊本・生国姫路の神戸育ち。昭和一〇年九州帝国大学医学部卒業、産婦人科教室に入局。昭和一四年上海篠崎医院に赴任、次いで福民医院・上海で開業・応召・終戦・現地残留・知り合いの中国人医師の病院に「留用」。昭和二七年東京に引き揚げて来たが、戦後の日本の風潮を嘆じて「これはわが住むべき地にあらず」と、昭和二八年単身貨物船に投じて、希望峰（ママー筆者注）を廻ってブラジルに渡航、後家族を呼び寄せ、現在の首都ブラジリヤから三〇〇キロ位の奥地ゴヤス州で、衛生局長の特別許可を得て無医村（ではなく一応は町）に開業満二〇年、その後サンパウロに移ってブラジル人の私立病院に勤務、一九八三年退職、ブラジリヤに隠退、現在に至るといふ波乱万丈、数奇な運命の持主である。(4)

また、古川直と森本憲治の間で遣り取りされた書簡には、某日、内山氏「内山完造―筆者注」から郭さんを紹介され六高（大正七年卒）・九大（大正十二年卒）の先輩であることを知り、それから交際が始まりいろいろ御厄介になりました。……終戦の翌年頃（？）、奥さんの事で少々お世話をしたことがあります。(5)

とある。更に別の書簡には、次のようにある。

それから約三年位たつてから「一九五二年のこと―筆者

注」、小生「古川直―筆者注」は共産党がつくづくいやになり帰国すべく、その筋に出国ヴィザを申請しましたが、仲々（ママー筆者注）ラチがあかないので、「偉い」郭さんに「よろしく頼みます」と手紙を出しましたら、旬日を経ず北京から変な印刷物（帯封つき）が来ました。よく見ると裏には差出人の名前はなく、表の宛名は古川直先生となつており、明らかに郭さんの自筆です。ハハーンと思いましたね。O. K. の無言の御通知でした。果して数日後、上海市政府外僑連絡事務局から出頭令書が来ました。そして出国査証をくれました。郭さんには下手な礼状を出すと思惑だらうと思つたので、礼状は出しませんでした。又、あの世界では偉くなるほど、いろいろと気を使う事があるらしいですね。(6)

一連の記述から、当時上海で郭沫若と古川直の間に一定の交流があつたことが読み取れる。

## (二) 古川直と森本憲治

古川直と森本憲治(7)の二人は、九州帝国大学医学部の同級生で、ブラジルに居住していた古川直が森本憲治を通じて詩軸を九州大学附属図書館医学分館に寄贈した（一九九二年十月九日）。寄贈の理由として、森本憲治宛の書簡に次のようにある。

別に家宝というほどではありませんが、何れ小生亡きあとは、家族の者共はその取り扱いに困るでしょう。

孫は混血ですしね。それでいいチャンスでもあれば日

本に送って、どこかの適当な資料館へでも寄附して、保管と展示でもして頂けたらと、かねがね考えておりました。(8)

### 三、詩軸に描かれた情景

そもそも詩軸のもとになった「舟游陽朔二首」其二は、一九三八年十二月十七日に作られたものである。当時、郭沫若は戦禍を逃れて桂林の地に身を寄せていて、同年十二月十七日には広西大学で講演を行った。また、講演後は于立群、杜国庠らとともに陽朔に向かった。一連の行程は郭沫若の自伝「洪波曲(9)」に詳細な記述が見られる。

「洪波曲」の該当箇所と対応させていくと、「舟游陽朔二首」其二は郭沫若が于立群、杜国庠らとともに漓江下りをした際の回想であることがわかる。では、なぜ郭沫若は漓江下りを詠じた詩(詩軸)を古川直に贈ったのか。以下、その可能性を提示する。

① 桂林・陽朔の絶景は日本でもよく知られていたことから、詩軸の贈り手である古川直を意識して「舟游陽朔二首」其二を贈った。

② 「洪波曲」と詩軸はともに一九四八年の作であるが、当時「洪波曲」執筆中の郭沫若の脳裏に「舟游陽朔二首」其二が深く焼き付いていた。

③ 「舟游陽朔二首」其二が郭沫若にとつて、会心の作或いは思い出深い作品であった。

④ 詩軸を贈った頃、郭沫若一家と古川直一家も川下りを経験した。つまり、類似の経験をしたことから、両家族がともに理解できる「舟游陽朔二首」其二を贈った。

### 四、人々を結ぶ詩軸

以上、九州大学所蔵の郭沫若関連の文物、とりわけ詩軸に関連する人物関係及び描き出された情景の分析を可能な限り試みた。しかし、郭沫若が古川直に詩軸を贈った際に、数ある詩の中で「舟游陽朔二首」其二を選択した理由は、依然として不明である。とまれこの詩軸から郭沫若と古川直、もしくは両家族の交友の一端が明らかになった。この点は従来、龔繼民・方仁念編『郭沫若年譜 一八九二—一九七八』全三冊(天津人民出版社、一九九二年)にも記載がなく、郭沫若研究者にも知られていなかった新事実である。

また、忘れてはならないのは、詩軸が今日、九州大学の所蔵となり得た背景には、郭沫若と古川直の関係(第六高等学校及び九州帝国大学の先輩・後輩の関係)の縦の関係のみならず、古川直と森本憲治のつながり(九州帝国大学の同窓生)横の関係)も大きく作用していることである。旧帝国大学時代の同窓生同士の深い絆を垣間見るようである。

(附記) 本稿は、「First World Congress of the International Guo Moro Academy (IGMA)」(於 アメリカ・Johns Hopkins

大学、二〇〇九年八月二十七（二十八日）において、口頭発表した原稿をもとにしたものである。また、『中国文学論集』第三十八号（九州大学中国文学会、二〇〇九年）にも拙稿が収録されているので、詳細は同書を参照されたい。

注

(1) 筆者は「九州帝国大学留学生の郭沫若が見た『千代の松原』（『中国文学論集』第三十七号、九州大学中国文学会、二〇〇八年）及び「郭沫若の訪日と福岡・九州大学」（『九州中国学会報』第四十七卷、九州中国学会、二〇〇九年）の中で、九州大学所蔵の郭沫若関係文物について紹介したことがある。あわせて参照されたい。

(2) 森本憲治「古川直君 郭沫若詩軸を図書館に寄贈」（『学土鍋』第八五号、九州大学医学部同窓会、一九九二年）に紹介記事がある。

(3) 「舟游陽朔二首」は『郭沫若全集』文学編第二卷（人民文学出版社、一九八二年、四〇二、四〇三頁）にも収録。

(4) 前掲注、森本憲治「古川直君 郭沫若詩軸を図書館に寄贈」。

(5) 一九九二年一月七日、古川直が森本憲治に宛てた書簡（前掲注、森本憲治「古川直君 郭沫若詩軸を図書館に寄贈」の引用文に拠る）。古川直が書簡でいう「奥さんの事」とは、一九四六年八月に于立群が郭平英北京・郭沫若記念館館長を出産したことを指すものと思われる。

(6) 一九九二年一月三十日、古川直が森本憲治に宛てた書簡（前掲注、森本憲治「古川直君 郭沫若詩軸を図書館に寄贈」の引用文に拠る）。

(7) 森本憲治は九州帝国大学医学部卒業後、ややあって福岡市博多区に「森本医院」を開業。本人はすでに他界。

(8) 前掲注、一九九二年一月七日、古川直が森本憲治に宛てた書簡。

(9) 「洪波曲」は一九四八年七月から同年十一月にかけて香港『華商報』副刊「茶亭」に発表されたもの。

【「郭沫若文献史料国際学術討論会」「IGMA年会」報告】

「郭沫若文献史料国際学術討論会」及び「IGMA年会」に参加して

藤田 梨那（国士舘大学）

二〇一〇年八月二十一日（二十二日）に、中国山東師範大学において、「郭沫若文献史料国際学術討論会」「IGMA年会」が開催された。中国郭沫若研究会、山東師範大学、国際郭沫若学会（IGMA）共同開催のこの会議に、中国、日本、韓国、香港、マカオ、アメリカ、チエコスロバキア、オーストリアからの学者八〇余名が出席、六〇名の発表があった。日本からは、岩佐昌暲、藤田梨那、岸田憲也、于亜、劉建雲が出席した。

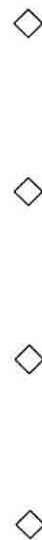
今回の会には二つのテーマがあった。郭沫若の文献発掘と研究資料収集である。文献発掘については、『郭沫若全集』に未収録の詩文の調査研究の成果が発表された。郭沫若記念館が記念館所蔵全集版本のDVDを制作し、その試用版が来会者に配布された。史料収集については、日本の研究プロジェクトが研究成果を発表した。二〇〇九年、「日本郭沫若史料収集」研究課題が四川省教育庁の重点研究課題として採用された。参加者は、岩佐昌暲、藤田梨那、岸田憲也、郭偉の四名である。研究チームは一九三〇年代から二〇〇九年までの、日本における郭沫若に関する研究論文、

著書及び郭沫若の作品、墨蹟等の調査、収集を行い、『日本郭沫若関連文献総目録』全一冊、『日本郭沫若研究資料集』全十八巻を制作し、学会でこれを披露した。アメリカの研究者からは、アメリカにおける郭沫若研究の状況についての報告があつた。その他、作家研究、作品研究など、多数の論文が発表された。

今回の学会にはいくつかの新しさが見られる。一つは、来会者の年齢層の変化である。来会者の三分の二以上は各大学、研究機関の若い学者や中堅の学者で占められた。二つは、学術的性格が強い点である。まず、出席者のすべてが学者、研究者であつた。党幹部や大学の責任者は招聘されなかつた。次に二日間にはわたり、席順は職称の区別なく、一律に名前の発音順に配列され、席はテーマごとに時計回りに全体移動する。さらに、最も重要なものは、発表された六〇篇の論文は文献史料や史実を重視し、緻密なテキスト分析を踏まえたものが多く、今までになく学術性の高い研究成果が挙げられた。

学会の最後を飾つたのは、「青年優秀論文賞」の発表である。八名の審査員によつて、四名の若い研究者（四〇歳以下）の論文が選ばれた。中国郭沫若研究会会長蔡震氏と国際郭沫若学会会長藤田梨那により、入選者に賞状が手渡された。郭沫若研究はすでに半世紀の歴史を辿つてきたが、この数年来、中国以外の地域で注目され始めた。日本、台湾、韓国、アメリカ、ヨーロッパでも研究者が現れつつある。郭沫若をグローバルな視野で再評価し、いままで見えなかつた本質や価値を客観的に見出し、これは郭沫若研究の発展と見ることができよう。

つた本質や価値を客観的に見出し、これは郭沫若研究の発展と見ることができよう。



【郭沫若研究会（六高記念館、二〇一〇年六月五日）報告】

### 郭沫若研究会のこと

大高 順雄（大阪大学名誉教授・大手前大学名誉教授）

二〇一〇年六月五日「第六高等学校百周年記念祭」の前日、六高記念館（現 岡山朝日高校）において、「第六高等学校同窓会」主催、岡山市日中友好協会共催のもとに「郭沫若研究会」を次のように開催した。

受 付 八時三〇分～九時

開会の辞 大高順雄

午前の部 九時～十二時

挨拶 郭沫若記念館館長 郭平英

一、楊勝寛（教授・梁山師範学院副院長）

李白に対する郭沫若の批評から「揚李抑杜（李白を称

え杜甫を抑える）」論まで——「李白と杜甫」を中心に

二、陳 俐（教授・四川郭沫若研究中心副主任）

郭沫若と同郷同窓との政治関係についての探究

三、鄧経武（教授・成都大学）

二〇世紀前期四川籍日本留學生集團の文化的創造について―且つ郭沫若を論じる

四. 郭平英(郭沫若記念館館長・中国日本友好協会理事)  
中日国交正常化前後の郭沫若

五. 蔡震(研究員・中国郭沫若研究会会長・四川郭沫若研究中心研究員)

郭沫若日本滞在中の幾首かの伝統詩作についての考証と解釈

六. 李曉虹(研究員・郭沫若記念館副館長・中国郭沫若研究会秘書長)

堅い氷を打ち破り未来を切り開く―郭沫若一九五五年訪日講演の文化的意味

午後部 十二時三〇分―十七時三〇分  
六高同窓会会長 金政泰弘

郭沫若記念館館長 郭平英  
駐大阪中国領事 戴徳茂

一. 岸田憲也(九州大学大学院)

郭沫若と第六高等学校の同窓―その「絆」を中心に

二. 名和悦子(内藤湖南研究会員・岡山大学大学院文化科学研究科TA)

「郭沫若の岡山時代」の史料収集について  
劉建雲(岡山大学非常勤講師)

郭沫若の早期日本留学についての再考察  
于亜(大手前大学非常勤講師)

五. 渡辺一民(立教大学名誉教授)

郭沫若と日本の文学者との交流  
六. 大高順雄(大阪大学名誉教授・大手前大学名誉教授・新村出記念財団評議員)

郭沫若訳「歌徳作浮士徳(ゲーテ作ファウスト)」の新造語

開会の辞 大高順雄

ただし、楊勝寛氏と渡辺一民氏は残念ながら所要のため参加されず、送って下った発表原稿により紙上参加となった。また、午後は郭平英館長、鄧経武氏と李曉虹氏は予定の車で後樂園、岡山大学、閑谷校の見学に出かけられたので、蔡震氏が来日研究者を代表して参加された。態々、ご出席して下さった方々の中には、吉備学園常勤理事土井宏輔氏、岡山商科大学招聘准教授楊立国氏の姿があった。

この「郭沫若研究会」は、開催を快諾し励まして下さった金政泰弘同窓会会長、諸経費の捻出にご助言を頂き中国領事館まで私を同伴して下さった景山義也先輩、折々に親切な支持を与えて下さった同学景山徹也氏、心温まるご寄付を下さった諸先輩、煩瑣な連絡を厭われなかった同窓会事務局の同学藤井新太郎氏、菱川喜美子氏のご協力により漸く開催を見ることが出来た。

なお、黒正清氏は郭平英ご一行が四日午後関西空港に着かれてから五日午後後樂園を経て閑谷校訪問、九州大学と熊本学園大学の視察のため岡山駅を離れるまで付き添われ、吉原司郎氏を初めとするOHKエンタープライズの方々には好意溢れる取材を行われ、山崎照夫氏、猪木正実氏、杭田嘉



夫氏には様々な場面を熱心に撮影・記録して頂いた。さらに、朝日高等学校には研究会会場に設置したPPT用の映写幕とPC、正門に立てかけた看板と会場に垂らした案内とを用意して頂いた。岡山大学の名和悦子氏と劉建雲氏には研究発表と合わせて会場の設営、受付にご尽力を頂いた。上に記した皆様にもその他の多くの方々にもここに深甚なる謝意を表する次第である。



## 【エッセー】

### 郭沫若―鄭成功―安平橋

斉藤 孝治（作家・ジャーナリスト）

私は郭沫若絡みのノンフィクション「シフトウルム ウント ドランク」を上梓した後、鄭成功を中心に据えた鄭一族と日中関係史について取材に明け暮れているが、その関係で過日、鄭成功の故地、福建省南安市石井鎮に程近い中国最長の石橋、安平橋を訪れた際、郭沫若が創った七律を刻んだ石碑を見つけ、深い感慨を覚えたのである。いうまでもなく安平橋に行ったのは、同橋が鄭一族と深い関わりがあったからだ。この安平橋は福建の晋江市安海鎮と南安市水頭鎮に跨る海湾に架かっており、橋の長さが五里（二

五〇〇メートル）なことから五里橋とも呼称されている。安海、南安それぞれの地は国際港、泉州の後背地であることなどから橋の持つ価値は非常に高く、その竣工は焦眉の急だったのである。橋の着工は宋の紹興八年（一一三一）で、日本では平清盛が福原（現 神戸）に港を造り、宋との貿易を始めようと考えていた頃であった。実は安平橋の着工は、鄭一族と繋がりを持つ安海黄氏の大商人、黄浩の大寄進によってこぎつけたものだった。泉州市対外文化交流協会刊の史資料によると、寄進額は銅錢一万貫（一貫＝一〇〇〇文）であった、という。もつとも橋は黄浩が急病で亡くなったために工事が中断の止む無きに至る、という不慮の出来事もあった。だが郡守の趙令衿の努力により足掛け十三年かかって紹興二十一年（一一五一）にやっと完成にこぎつけることが出来たのである。

鄭一族と安海黄氏との繋がりといえば、鄭成功の伯祖父、鄭士俤の先妻と後妻はいずれも安海黄氏の出身であり、鄭成功の父、芝龍の五弟、芝豹は後妻の黄氏が生んだ唯一の男子ながら兄芝龍や甥成功を陰から支えた人だった。また芝龍が万曆四〇年（一六二二）、日本の平戸にやって来たのは澳門で貿易を行なっていた安海黄氏一族の黄程のいっけで平戸在住の中国人貿易商人、李旦に白糖、奇楠、鹿皮、麝香を届けるためだった、と清代の史書「台湾外記」（江日昇著）には書かれているのだ。

一方、安平橋の中期には水心亭という名の休息所が造られ、亭の中には菩薩像が一体供奉されていて往来する人々の心を癒していたのである。だが竣工以来五〇〇年近く経

った崇禎一〇年（二六三七）になると水心亭は、風雨にさらされて破損が目立つたものの、改修がほとんどなされなかつたために見る影もなくなっていた。その頃、鄭芝龍は、曲折の末、日本や東南アジアなどとの貿易で大海商として名を成す一方、明朝の招撫を受け、浙江、福建、広東で多発する海賊行為や密貿易を取り締まる責任者、三省総戎大將軍に就いていたのだ。併せて芝龍は安平橋から北東にやや行った安海鎮に鄭府と称する廣大、豪壮な館を造り、そこからは船が安平橋の袂まで行き来できる水路も設けられていた。鄭成功の朱子学の師、曾其五が編纂した「安平鄭府實録」によると、鄭府の広さは一三八畝（一畝＝六・六六七アール）で、数ある樓閣の中には、何とキリスト教の天主堂さえ出来ていた、という。実は芝龍は澳門時代、イエズス会の洗礼を受けており、洗礼名はニコラといわれていた（ジヤスパールという説もある）。悠々迫らぬ芝龍は、水心亭の荒廢を放っておかず、地元の有力量者、曾希止らと計って改修にかかり、一年後、水心亭は創建時の姿を甦らせたのだ。その時、石匠として改修に携わったのは黄重という人で、この人もまた安海黄氏の一員であった。改修の経緯については、芝龍がしたためた「重修水心亭記」という一文の石碑が水心亭の中にある、と側聞していたが、折角赴いたにも関わらず見出すことが出来なかつた。

だが望外にも郭沫若が創った「咏五里橋」と銘打った七律の石碑を見つけたのである。何とも言えぬ喜びだった。この七律は「五里橋成陸上橋、鄭藩旧邸踪全消、英雄氣魄垂千古、勞働精神漾九霄、不信君謨真夢醋、愛看明儼偶題

糕、復台得意誰能識、開辟荊榛第一条！」で、一九六二年十一月十三日、郭沫若が于立群とともに安平橋や水心亭を参観した際、創ったものであった。折から、この年は鄭成功が台湾からオランダを駆逐して彼の地に政權を樹立してから三〇〇年経っていた。その台湾は、国民党の強い影響下にあり、中国にとつて台湾問題は難事の中の難事だった。節目の年なことから二月一日には、北京で「鄭成功光復台湾三百周年紀念」との記念集會が開催されたり、鄭成功が台湾解放の基地にしていた厦門では「鄭成功紀念館」がオープンしたりしていたのだ。郭沫若自身も時流に併せて「台湾自古属中華、漢族高山是一家、千秋大業驅荷虜、一代英雄賜姓爺」という七絶を創っていた。

そうした状況下、郭沫若は五月、中国人民解放軍管轄の映画製作所「八一電影制片廠」から映画の台本「鄭成功」の執筆について依頼を受け、夏休み中、避暑地の北載河にこもりつきりですれを仕上げたのである。しかしながら「実事求是」を大切にすする郭沫若は、現地調査をしていないことが不満であり、新たな感性や知識を得ようと、浙江や福建にやって来たのだ。安平橋参観もその一環で、直前には泉州で開元寺を訪れ、芝龍が寄進した大鐘をつぶさに調べたりしていたのである。七律の中にある「鄭藩旧邸」つまり鄭府は、戦乱によつて跡形もなく、郭沫若は改めて現場を踏むことの大切さをかみしめたのだ。その折、郭沫若は杭州に於いて六高以来の親友で当時、山東大学の学長を務めていた成仿吾と旧交を温めたが、成仿吾は映画の台本「鄭成功」について「一日も早くいい作品に仕上げしてほしい」

と激励した。この時、成仿吾は中国教育界の指導者として徐州、長沙など各地の教育現場を回っていて、杭州に来ていたのである。二人が会ったところは、人民解放軍浙江軍区の招待所で、このことから人民解放軍が「鄭成功」の実現に熱心だったかがうかがわれるのだ。一連の現地調査の結果「鄭成功」は加筆訂正され、翌年「電影創作」の二期三期を飾り、郭沫若はそれなりに満足したのである。しかし肝心の映画化は政治の混乱などから結局、陽の目を見なかったのだ。残念至極としか言いようがなかった。

最後に私事になるが、一九八八年に製作された井上靖原作の日本映画「敦煌」は現地の撮影などで人民解放軍と八一電影制片廠から多大な協力を受けていたのである。製作は大映映画の社長だった徳間康快が総指揮をとり、徳間と深い関わりがあった私と妻は「敦煌」と八一電影制片廠には様々な思い出を持っていったのだ。安平橋を去る時、郭沫若だけでなく徳間のことも頭に浮かんで仕方がなかった。



## ◆ ◆ ◆ 国泰大戲院—郭沫若『屈原』を上演した劇場

瀬戸 宏（摂南大学）

一九四二年四月に上演された『屈原』は、郭沫若の代表作の一つであるだけではなく、抗戦期中国演劇の代表作の一つでもあることは、すでに多くの人が認めている。『屈原』は重慶・国泰大戲院で上演されたが、国泰大戲院については日本ではあまり紹介されているとはいえない。国泰大戲院について、私の知るところを記してみたい。

国泰大戲院は、重慶の資本家鄭石均、趙巨旭らが資金を拠出して建設した民間劇場である。当時の金で一四万銀元が投資されたという。一九三七年二月八日正式に開業した。所在地は柴家巷である。柴家巷は現在は存在しない地名で、今日の渝中区鄒容路とほぼ等しい。重慶のシンボル解放碑のすぐそばで、当時も今日も重慶一の繁華街である。

国泰大戲院は座席数一五〇〇で、天井からは磨りガラスの大シャンデリアが六個下がり、その他の室内灯は両側の壁面につけた板の間から光が出るようになっていた。両側の壁には、さらにそれぞれ四つの扇風機が取り付けられていた。劇場入り口には、「国泰大戲院」の五字のネオンサインが輝いていたという。このような設備は、一九三七年当時の重慶では極めてモダンなものであった。

国泰大戲院はまた、この時期の重慶にまだ残っていた客席での物売りなどを廃止し、入り口でのチケット販売、座席指定制をとり、良好な鑑賞条件の保持を作り出した。

国泰大戲院という名称は、明らかに上海・淮海路に一九三二年開業した国泰大戲院（CATHAY THEATRE）をまねている。重慶の国泰大戲院も映画館を兼ねたものであったが、今日この劇場が全中国で広く知られ、今日では国泰大戲院といえはふつう重慶のものを指すのは、話劇上演のためである。国泰大戲院は抗戦期重慶の中心的劇場となり、今日調査されているところでは抗戦期中に九四の話劇を上演した。今日、重慶での抗日話劇運動の開始とされる一九三八年十月の曹禺・宋之的『全民総動員』（『黒字二十八』）も、国泰大戲院での上演である。郭沫若『屈原』は、その最も著名な上演の一つである。

なぜ国泰大戲院は重慶話劇運動の中心劇場となったのか。その大きな理由は、地の利の良さであることはいうまでもない。しかし、国泰大戲院がその役割を發揮できたのは、それだけではない。抗戦期中に経理（支配人）となった夏雲瑚の貢献と切り離すことはできない。

夏雲瑚（一九〇三〜一九六八）は重慶巴県（現、南岸区）出身で、上海崑崙影業公司董事長となるなど映画人として知られているが、抗戦期の話劇運動にも大きな役割を果たしている。国泰大戲院成立時、彼も出資を求められ応じたが、その額は総株式発行高の二％に過ぎなかった。一九三八年五月の日本による重慶爆撃で国泰大戲院が破損すると、

夏雲瑚は映画上映の関係などで国泰大戲院の経営を引き受けざるをえなくなった。夏雲瑚は同年十月国泰大戲院の修理を終えると、話劇上演も積極的におこなった。映画会社経営を通して作り上げていた俳優らとの人間関係が、話劇上演の組織にも役だった。国泰大戲院は民間経営劇場で、政府とはやや距離があったことも、反国民党政府の色彩が濃厚だった話劇の上演に有利に働いた。夏雲瑚や抗戦期国泰大戲院については、夏瑞春『夏雲瑚与中国現代戲劇和電影的不了縁』（『中国話劇研究』第十二集）、許浩然『戦時重慶国泰大戲院話劇演出活動』（重慶師範大学碩士論文、CNKIで閲覧可）などに詳しい。

こうして、国泰大戲院での活発な話劇活動は、一九四三年六月に話劇運動を恐れた国民党政府が国泰大戲院に対して話劇上演の禁止令を出すまで続いた。

その後、国泰大戲院は一九五三年に和平電影院と名称変更した。文革期に東方紅電影院となったが、まもなく和平電影院の名称が復活した。一九九四年には国泰電影院となった。二〇〇七年重慶再開発のため取り壊された。跡地には国泰大戲院と重慶美術館を含む国泰芸術中心の設立が決定され、その完成予想図も公表された。当初は二〇〇九年完成とのことであったが実現せず、私が二〇一一年二月に重慶を訪問した際にはまだ工事が続き、完成にはほど遠い状態であった。現時点では二〇一一年下半期竣工が予告されているが、実現するかどうかはまだわからない。



## 安藤彦太郎先生ご夫婦と郭沫若の友情

藤田 梨那（国士舘大学）

二〇〇九年十月末、早稲田大学名誉教授安藤彦太郎が逝去された。私がこのことを知ったのはそれから一ヶ月も経ってからのことである。安藤彦太郎先生及び奥様岸陽子先生が郭沫若と長年にわたり親交をもっておられたことを前々から聞いていて、ご夫婦にインタビューして、この辺のことを伺おうと思っていた。十一月のある日、インタビューを打診しようと岸陽子先生に電話連絡した。そのとき初めて安藤先生のご逝去を知った。私は愕然とした。同時に自分の怠慢を悔いた。どうしてもっと早く連絡しなかったのか。どうして新聞に掲載された訃報に気付かなかったのか、と自分を責めた。

安藤先生のお別れ会は年を明けて、二〇一〇年一月二十四日、先生が学院長、名誉学院長を務められた日中学校で営まれた。私は「お別れの会」に参加して、来会者とともに安藤先生の死を悼んだ。

二月に入り、岸先生にお会いすることができた。安藤彦太郎先生、岸陽子先生と郭沫若の交流について、岸先生はいろいろ語ってくださった。

安藤先生は一九一七年の生まれ、青年時代に早稲田大学で経済学と日中関係史を学ばれた。先生と中国との縁は一九六〇年代から始まる。一九六三年、北朝鮮を訪問され

た折、中国に立ち寄ったのが中国大陸と直接関わった最初の体験である。その時、北京で周恩来や郭沫若の接見を受けた。一九六四年、アジア・アフリカ科学シンポジウム開催準備のため、再び北京に赴き、日本側の準備委員会事務局長を務めた。当時日中両国はまだ国交を回復していなかった。しかしにもかかわらず、日本からは六十一名の学者がシンポジウムに参加した。その際、郭沫若は六十一名の日本代表団全員に一人一人の名を入れた揮毫作品を贈られた。岸先生はそのとき通訳として随行していた。北京シンポジウムは岸先生を安藤先生に引き合わせる機会となった。岸先生にも郭沫若は書を贈っている。先生はそれをずっと大切にしていた。私は、できたらその書を拝見したいと申し込んだところ、「それでは、今度我が家に見に来てください。」と快諾してくださった。

北京シンポジウム後、安藤先生は引き続き北京に残り、在外研究員として、社会科学院近代史研究所に身をおいて研究を行なったが偶然のことから『毛沢東選集』日本語翻訳の監訳にもあたった。その間、たびたび郭沫若と会っていた。

こう見てくると、安藤先生が初めて郭沫若に会ったのは一九六三年と思われるが、実はもっと早い。それは一九五五年の中国科学者代表団訪日の際であった。一九五五年十二月、郭沫若を団長とする十五人の訪日代表団が来日した。日中国交断絶の状況下、また東西冷戦の厳しい時期にあつて、一行の訪日は公式的ではなく、日本の学術会議いわゆる民間団体の招聘で実現したものである。当然、国立大学

の公式訪問を禁止されていた。そのとき、安藤先生は歓迎委員会の委員として、接待に奔走した。安藤先生は当時の早稲田大学総長大浜信泉先生に掛け合つて、何とか代表団を早稲田大学に呼び、郭沫若団長に講演してもらおうと提案した。これに対して、大浜総長は、「よし、早稲田が引き受けよう。」と即決した。かくして、代表団は来日の翌日、十二月二日に早稲田大学を訪問、大隈講堂で盛大な歓迎レセプションが開かれた。そして、十二月八日、団長郭沫若が早稲田大学で講演を行なつた。講演会は大学の太隈講堂で行なわれたが、学生が殺到して、あつという間に講堂を埋め尽くしてしまつた。座りきれない学生は演壇に上り、座り込んだ。それでも入りきれない学生は講堂の外に集まり、マイクで講演を聞くことになつた。私もかつてこの講演を聞いた数人の方から当時の様子を聞いたことがある。彼らは今でも当時の熱狂的な雰囲気を感じ出して、思わず興奮するといふ。しかしこの講演の実現に安藤先生が関わつていたことを知る人は少ないのではないだろうか。

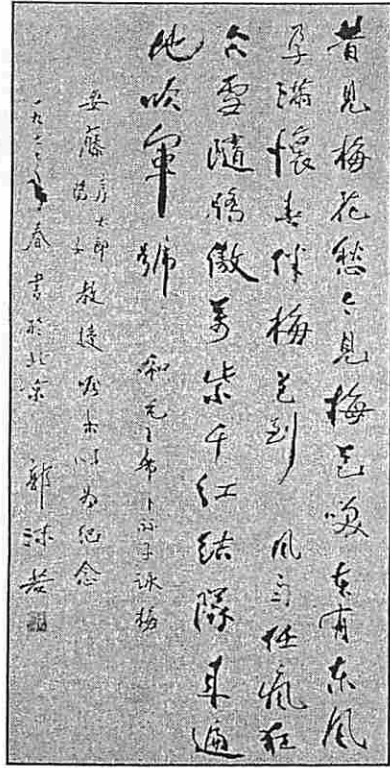
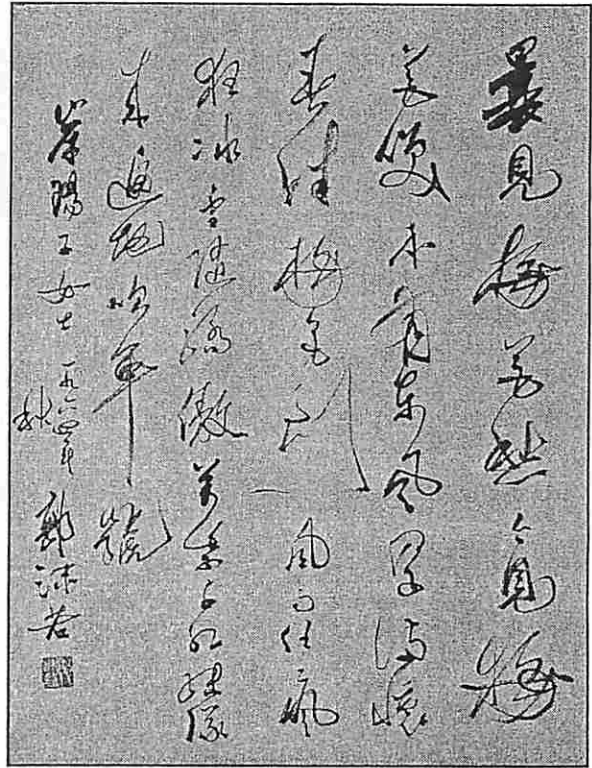
北京アジア・アフリカ科学シンポジウムは安藤先生と岸先生に良縁をもたらして、一九六七年についてお二人は結婚された。中国社会科学院からお二人は新婚旅行として招待された。北京に到着したお二人のために郭沫若は人民大会堂で歓迎の宴会を開き、二人の結婚を祝福した。岸先生はその時のことをよく覚えておられる。席上、郭沫若の作品『卓文君』の話に及び、岸先生は東京外国語大学時代にこの『卓文君』を語劇祭で演じたことがあると言つたら、

郭沫若は「科白はまだ覚えているか」と聞いた。岸先生は郭沫若の前で『卓文君』の科白を暗誦した。「我所不能了解的，這天地之間何以會有這樣背理的，不可抵抗的命運，就如我自己……」これは卓文君の科白の一節である。私は「岸先生は『卓文君』のどの役を演じたのですか。」と聞くと、先生は、「一九五七年頃の話ですが、当時クラス四〇名の学生の中に女子学生はたつた三人でした。結局私が卓文君を演じることになつた。それで、毎日毎日科白を覚える練習をした。」とおっしゃられた。衣装は「前進座」から借りたもので、写真も撮つたそうだ。してみれば、岸先生も安藤先生に負けず学生時代から郭沫若に傾倒されていたのである。お二人は結婚されてからも郭沫若と交流が続く。私は先生に尋ねた。「先生にとつて、郭沫若はどのような存在ですか？」岸先生は、「郭沫若先生は私に中国近代文学を垣間見させてくれた方です。私の中国文学に対する興味は高校の時、竹内好先生の『魯迅』を読んだことがきっかけですが、郭沫若先生の芝居を演じたことは私に大きな影響を与えてくれました。もう一つは、郭沫若先生の人間的な一面に惹かれました。」と仰つた。

岸先生とお会いしてから、郭沫若から贈られた書のこと気がなつて、いつ拝見できるかと首を長くして待つていた。五月末に岸先生から連絡が来て、「郭沫若の書を探したから、見に来て。」とのこと。私は早速杉並区にある先生のお宅を訪ねた。お宅は倉敷で見たような蔵作りの大きな屋敷で、モダンな住宅街に、落ち着いて、奥ゆかしく見

えた。客間に通されて、見ると、テーブルの上に四本の軸物があった。「私たちは郭沫若先生から四本の書をいただいた。」と先生が仰った。早速広げて拝見させていただいた。第一幅は一九六四年秋、岸陽子先生宛ての「和毛主席 卜算子 詠梅」、第二幅は一九六五年、安藤彦太郎先生宛ての毛沢東の詩「冬雲」、第三幅は一九七七年、安藤先生ご夫婦宛ての「实事求是」、第四幅は同じく一九七七年、安藤先生ご夫妻宛ての「和毛主席 卜算子 詠梅」であった。四幅のうち、六〇年代の二幅は大変力強く、潑刺とした筆致である。七年の書は力強さは変わらないが、丸みを帯び、沈着した雰囲気を見せている。特に「和毛主席 卜算子 詠梅」は、郭沫若の好きな詩のようだ。二回も揮毫している。しかし筆致は対照的である。これらの書の中に、岸先生は「实事求是」が最も素晴らしいと仰った。確かに、郭沫若はこの「实事求是」をいろんなところで書いている。郭沫若の心の何処かでこの四文字が表わしているものをずっと求め続けたのかもしれない。郭沫若は一九七八年六月に亡くなった。亡くなる一年前に郭沫若は安藤先生ご夫婦にこの書を書いたのである。

この四幅の書を目の前にして、私は、郭沫若と二人の日本人との間に真摯な友情が長い年月に渡って脈々と流れているのを見ているようであった。この四幅の書はまさに安藤先生ご夫婦と郭沫若の友情の証しと言えよう。



◆  
◆  
◆  
◆

■国際郭沫若学会（IGMA）成立■  
郭沫若研究者の国際的な研究組織「国際郭沫若学会」が結成された。この学会は二〇〇九年八月二十七日（二八日アメリカ・メリランド州のジョンズ・ホプキンス大学で設立大会を兼ねた第一回大会を開き、中国、日本、韓国、アメリカから約五十人の研究者が集まり、研究発表と討論を行った。大会では藤田梨那氏を初代会長に選任し、第二回大会を二〇一〇年山東師範大学で開催することを決めた。本号巻頭の河内、岸田の二論文はそのときの報告論文をもとにしたものである。

■『郭沫若の世界』刊行■  
岩佐昌暉・藤田梨那・武継平共編『郭沫若の世界』（花書院・二〇一〇年七月）が刊行された。当会が〇八年九月九州大学で開催した「郭沫若九大留学九〇周年記念国際学術集会」での報告論文と資料集（全一七四頁）で定価二五〇〇円。内山書店、東方書店、（博多）中国書店等で販売中。会員には全員に配布した。

■『日本郭沫若研究資料集』出版■

岩佐昌暉・藤田梨那・岸田憲也・郭偉の四名が応募して採択された。〇九年度四川省教育庁の科学研究費補助金による研究「日本における郭沫若資料の収集」が完了し、『日本郭沫若研究資料集』として全十八巻にまとめられた。日本で刊行された日本語による郭沫若関係文書のオリジナル資料を収集・コピーしたもので、昨年八月梁山師範学院の郭沫若研究中心に送呈された（本号藤田の報告参照）。このうち『日本郭沫若関連文献総目録』が、このたび明德出版社から出版された。定価一〇〇〇〇円。

■藤田梨那訳『女神』刊行■

郭沫若の処女詩集『女神』が、このほど藤田梨那氏によって完訳され、明德出版社から出版された。『女神』の全訳は日本では初めて。定価一九〇〇円。

■新入会員紹介（五十音順）■

- ・于 亜 氏 神戸大学大学院研究員。
- ・大久保洋子氏 二松学舎大非常勤講師。中国近代文学。
- ・河内利治氏 大東文化大学教授、書家。
- ・劉建 雲 氏 岡山大学非常勤講師。

■退会会員（五十音順／ここ数年分をまとめて列挙）■

- 斎藤喜代子氏、潘世聖氏、牧山敏浩氏、李麗君氏

■会員異動■

武継平事務局長：上海財經大学より福岡女子大学に着任

■編集後記■

三月東北・関東大震災の直後、北京に調査旅行。現地テレビは早朝から生なましの映像を流し、中国の研究者たちとの話ももつぱら地震の話から始まった。北京郭沫若記念館をはじめ、韓の郭沫若研究者たちから相繼いで慰問のメールが届き、心が熱くなった。事務局からも関東の会員に心からお見舞い申し上げる。三・一一は文字通り日本の今後を左右する転換点となるだろうか。われわれの研究にはどういう影響をもたらすだろうか。今号からは岸田憲也が編集を担当する。

この度、初めて会報の編集業務を担当させていただきました。編集の過程では、岩佐・藤田両先生から貴重なご意見を頂戴した。記してお礼を述べたい。この会報も第12号（総No.13）に突入。第11号が二〇〇九年一月の発行だったので、約二年ぶりとなる。その間、各地で郭沫若関連の研究会が開催された。私事で恐縮であるが、第一回国際郭沫若研究会では、若手研究者賞に選出された。今日までの諸先生方のご指導、ご鞭撻の賜物である。一方、国内に目を向けると、先の東日本大震災およびその余震の爪痕は生々しい。被災された方々のことを思うと、胸が痛む。復興には数年単位の時間が必要であろう。今が大切な時。何とかして乗り切っていかなければならない。

（岸）